

平成23年度 国立磐梯青少年交流の家体験活動等普及啓発事業

# 青少年体験活動フォーラムin磐梯

～体験活動を通して、青少年の未来を考える～

期日：平成23年11月12日(土)～11月13日(日)



【主催】

独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立磐梯青少年交流の家

【共催】

独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立赤城青少年交流の家

独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立中央青少年交流の家

独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立那須甲子青少年自然の家

独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立信州高遠青少年自然の家

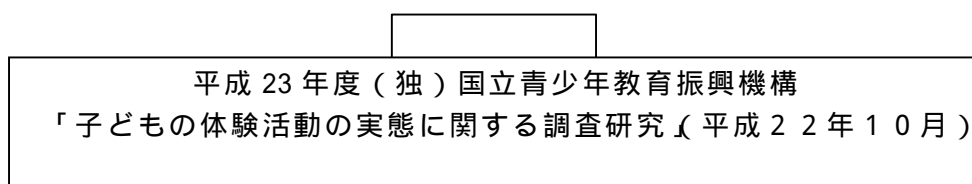
## 事業の背景

【国の施策より】

平成23年度青少年の体験活動の推進  
「体験活動推進プロジェクト」  
<全国的な普及啓発の実施>  
家庭や企業などへ体験活動の理解を求めていくための普及啓発を実施する。  
・ 青少年の体験活動の必要性・重要性を広く家庭や社会に発信する。  
・ 青少年の体験活動の推進に寄与する団体間の連携を図る。

【国立青少年教育振興機構年度計画より】

平成23年度（独）国立青少年教育振興機構「年度計画」  
<青少年の体験活動等の重要性について普及・啓発>  
青少年の体験活動や読書活動，基本的な生活習慣等の重要性を社会に発信するため，関係機関・団体と連携した事業や施設を活用した事業等を実施する。  
「体験の風をおこそう運動」を通じて，青少年の体験活動を推進する気運を高めるための各種事業を行う。



全国へ発信

青少年体験活動フォーラム in 磐梯

## 事業の概要

### 1 趣 旨

青少年の体験活動の関係者が一堂に会し，青少年の課題に対応した体験活動の事例研究，ワークショップでの体験や情報交換を行い，青少年教育指導者の資質の向上を図る。

2 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立磐梯青少年交流の家

3 共 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立赤城青少年交流の家  
独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立中央青少年交流の家  
独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立那須甲子青少年自然の家  
独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立信州高遠青少年自然の家

4 後 援 福島県・山形県・宮城県・群馬県・千葉県・埼玉県・栃木県・茨城県・長野県・静岡県各県教育委員会

5 会 場 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立磐梯青少年交流の家

6 期 日 平成23年11月12日（土）～11月13日（日）

7 対 象 青少年教育行政担当者，青少年教育施設職員，学校教育行政職員，学校職員，青少年団体指導者，集団宿泊活動受入地域関係者，民間教育事業者，その他青少年の体験活動に関心のある者

8 参加人数 77名

## 9 企画・評価会議

### (1) 構成

国立赤城青少年交流の家・国立中央青少年交流の家・国立那須甲子青少年自然の家・国立信州高遠青少年自然の家・国立磐梯青少年交流の家の各次長・企画指導専門職・総務係長

### (2) 日程

企画会議 平成23年7月18日(月)～7月19日(火)

(会場：国立磐梯青少年交流の家)

評価会議 平成24年1月25日(水)～1月26日(木)

(会場：国立中央青少年交流の家)

## 10 講師

### (1) 基調鼎談 北見 けんいち氏(漫画家)

河口 仁氏(漫画家)

寺島 敬治氏(漫画家)

### (2) 事例発表 山崎 栄寿氏(国立赤城青少年交流の家企画指導専門職)

望月 省吾氏(国立中央青少年交流の家企画指導専門職)

酒井 憲一氏(国立信州高遠青少年自然の家企画指導専門職)

鈴木 昭博氏(国立那須甲子青少年自然の家企画指導専門職)

### (3) ワークショップ

横田 清美氏(福島県自然保護協会事務局長)

橋口 直幸氏(NPO法人こどもの森ネットワーク理事長)

遠山 直樹氏(国立磐梯青少年交流の家企画指導専門職)

佐藤 公氏(磐梯山噴火記念館副館長)

岡田衣津子氏(日本体験学習研究所研究員)

## 11 日程

1日目：11月12日(土)

時刻	プログラムの内容等
12:30	参加者受付
13:00	【開会式】
13:30	【基調鼎談】 「青少年期の体験から生まれる漫画の世界」 北見けんいち氏・河口 仁氏・寺島 敬治氏
15:20	【分科会】 事例1「あかぎ多文化共生推進プロジェクト」 国立赤城青少年交流の家企画指導専門職 山崎 栄寿氏
	事例2「被災した子どもたちへの支援事業」 国立中央青少年交流の家企画指導専門職 望月 省吾氏
	事例3「タイニーキャンプ(小学校低学年)の普及」 国立信州高遠青少年自然の家企画指導専門職 酒井 憲一氏
	事例4「東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)への対応とて、那須甲子青少年自然の家が避難者のために何ができたのか」 国立那須甲子青少年自然の家企画指導専門職 鈴木 昭博氏

17:00	【全体報告会】 事例1から事例4の順に分科会の内容を報告
19:00	【夕食・情報交換会】
23:00	消灯・就寝

2日目：11月13日（日）

時刻	プログラムの内容
6:15	起床
7:00	【朝のつどい】
7:15	朝食（～8:30）
9:00 ～ 11:50	【ワークショップ】 A「自然観察におけるファシリテーションの手法」 福島県自然保護協会事務局長 横田 清美 氏 B「森のようちえんが育む子どもの生きる力」 NPO法人こどもの森ネットワーク理事長 橋口 直幸 氏 C「読書活動と体験活動を関連させた指導法」 国立磐梯青少年交流の家企画指導専門職 遠山 直樹 氏 D「火山のジオパークを100倍楽しむ方法-磐梯山を例に-」 磐梯山噴火記念館副館長 佐藤 公 氏 E「コミュニケーション作りのための体験活動」 日本体験学習研究所研究員 岡田 衣津子 氏
12:10	【閉会式】
12:30	解散

## 12 プログラムについて

### （1）企画をする上で留意した点

関東周辺の国立青少年教育振興機構5施設による共催の事業のため、各施設の次長・担当企画指導専門職で組織した企画会議を7月に持ち、事業の基本的な考えや内容・日程について検討し事業を進めた。

平成22年度に国立赤城青少年交流の家で開催した反省を生かした企画とした。

#### ア 全体会・分科会について

##### 【昨年の成果・課題より】

分科会の時間が短かった。発表事例数も6事例と多く、全体会の時間もある程度必要となり短くなってしまった。

全体会の発表を聞いてから分科会を選択したかった。そうでなければ全体会を行わずに、その時間を全体会に回した方がよい。

##### 【今年度の試み】

発表事例数を4つとした。

分科会を先に行い、全体会はその報告会とした。そうすることで、分科会の時間を十分に確保した。全体会については、情報共有の場として、短時間にはなるが実施した。他の分科会について興味をもち、さらに情報を得たいと思う参加者を想定し、情報交換会をその場として活用する。

#### イ ワークショップについて

##### 【昨年の成果・課題より】

募集チラシのワークショップの内容がもう少し詳しく分かるようなものであればさらによかった。

【今年度の試み】

昨年同様に5つのワークショップ（各ワークショップ20名程度）を実施した。

「コミュニケーション作りのための体験活動」は昨年と同様の内容となるが、主催施設として普及に努めている内容なので今年度も実施した。

募集チラシに詳しい内容を盛り込んだ。

(2) 運営する上で留意した点

参加者に対して、会場や開始時刻を館内放送で知らせたこと運営がスムーズにいくようにした。

各分科会およびワークショップに運営スタッフが参加し、各分科会・ワークショップの運営がスムーズにいくようにした。

(3) 安全管理上で留意した点

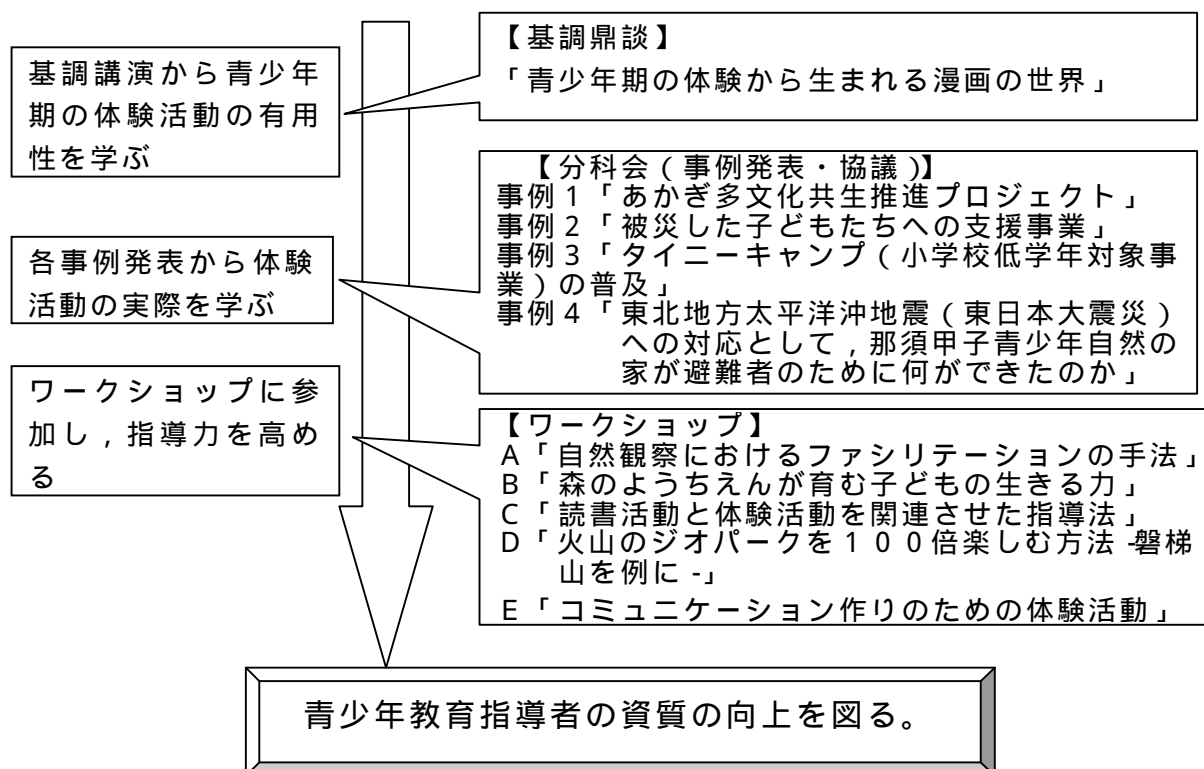
スタッフの運営マニュアルに事故発生時の対応マニュアルを記載し、緊急時の対応が組織的に迅速に対応できるようにした。

参加者から「事前健康調査票」を提出していただき、食物アレルギー等について運営スタッフが確認した。また、緊急連絡先なども把握し、緊急時の対応が迅速に行えるようにした。

気温差が大きく、暖房を入れたり、服装に配慮するよう呼びかけたりし、参加者の健康面について配慮した。

研修会場には、湯茶コーナーを設置し、水分補給と休息に利用していただいた。

(4) プログラムの構成について



## (5) 主なプログラムの内容

### 基調鼎談「青少年期の体験から生まれる漫画の世界」

「釣りバカ日誌」を代表作とする漫画家北見けんいち氏、赤塚不二夫プロダクションで一緒だった河口仁氏・寺島敬治氏をお迎えし、青少年の成長や学びに必要なことを御自身の貴重な体験をもとに話ししていただいた。

### 事例発表・分科会

- 事例1 「あかぎ多文化共生推進プロジェクト」  
教育関係諸機関との連携協力の下、ブラジル人学校に通学する外国人子女を対象に、日本語習得及び日本社会の文化・習慣の理解促進をねらいとして実施した事業の発表があった。集団宿泊学習や自然体験活動等を通して、日本人との交流や野外での体験活動が希薄であるという実態を把握でき、今後はその課題を改善するためのプログラムを検討・実践していく。
- 事例2 「被災した子どもたちへの支援事業」  
東日本大震災で被災した子どもたちと、それ以外の地域の子もたちが寝食を共にした共同生活を送りながら交流し、共に日本一の富士登山に挑戦した事業の発表があった。この事業を通して、被災地の子どもたちは、傷ついた心を癒すとともに楽しい思い出ができ、それ以外の子どもたちは、震災の大変さをより現実的に感じ、同世代の仲間の姿を見て自分も頑張るという気持ちをもつことができた。
- 事例3 「タイニーキャンプ（小学校低学年対象事業）の普及」  
国立信州高遠青少年自然の家が3年間にわたり実施してきたタイニーキャンプ（小学校低学年対象事業）の実績と成果、ノウハウを広く近隣の公立施設に普及してきた。これまでのプロセスや関わり方、また公立施設における事業の様子についての発表があった。
- 事例4 「東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）への対応として、那須甲子青少年自然の家が避難者のために何ができたのか」  
3月11日に起きた東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）。誰もが予想だにできなかった災害に、那須甲子青少年自然の家として避難者のために何ができたのだろうか。避難所として運営していくために、試行錯誤を繰り返しながら、避難者対応のプログラムを年齢や状況に応じて企画したり、避難者の自治組織を立ち上げるための支援をしたりと、那須甲子青少年自然の家としてのソフト面、ハード面を活かしながら取り組んできました。その取り組みの中で学んだことや今後の施設としての課題などを5か月の記録事例発表があった。

### ワークショップ

- A 「自然観察におけるファシリテーションの手法」  
自然観察は、自然保護教育の一環として行うものであり、五感を使って自然を体験させ、人と自然とのかかわりや自然のしくみに気づかせ、自然を大切に思う気持ちを育む活動である。自然観察の参加者の能力、やる気、主体性を引き出す指導方法や実際に行う際の留意点などを研修した。
- B 「森のようちえんが育む子どもの生きる力」  
ドイツで視察してきた「森のようちえん」の福島での実践例を中心に、指導法や子どもの変化について研修した。後半では、幼児といっしょに森に出かけ、子どもを自由に安全に遊ばせながら、幼児向けの森遊びでのアクティビティの紹介もあった。
- C 「読書活動と体験活動を関連させた指導法」  
近年、青少年の読解力や思考力の低下が問題視されている。地域の民話を聞き、その舞台を訪ね、さらにその体験活動をもとにした絵本作りの実践の紹介と実際に絵本作りを体験した。読書活動と体験活動を関連させた活動は、読書活動の普及のみならず、読解力や思考力を高める意味でも教育効果が期待できるものだ。
- D 「火山のジオパークを100倍楽しむ方法 -磐梯山を例に-」  
子どもたちが学校で学ぶ火山は、知識の習得に追われ、そのダイナミズムを感じとることは難しいと思われる。そこで、楽しい実験と映像と実物を使い、火山が大好きな子どもに変身させる方法を研修した。
- E 「コミュニケーション作りのための体験活動」  
青少年の抱える課題として、コミュニケーション能力や社会規範意識などの低下が挙げられる。そこで、コミュニケーション能力の育成を目指した「体験学習の手法」を研修し、よりよい人間関係を構築するためのファシリテーターとしてのスキルの向上を図った。

## 事業の実際

### 2 基調鼎談「青少年期の体験から生まれる漫画の世界」

司会：国立磐梯青少年交流の家次長 大樂 郁仁（以下 大樂）

鼎談者：漫画家 北見 けんいち氏（以下 北見氏）、漫画家 河口 仁氏（以下 河口氏）、漫画家 寺島 敬治氏（以下 寺島氏）

大 樂：では講師の先生方を簡単ですが、私のほうからこの場でご紹介申し上げます。

本日おいでいただきました北見けんいち先生ですが、画面にございますとおりたいま上映しました“釣りがバカ日誌”の原作者でもございます。それから“愛しのチーパッパ”“南大阪信用金庫”というような様々な作品を展開しております。私の数少ないコレクションの中でこの“釣りがバカ日誌”はパイプルのようなものでして、いまのところ1巻から30巻くらいまではこの磐梯青少年交流の家の職場の私の机の前にございまして、毎日毎日眺めておるところです。第1巻の見開き、浜崎伝助氏ですけどもまだ非常に若いんですけども、まだ生まれたばかりということで、この第1巻のところで誕生します。そしてしばらくいきますと第2巻の見開きにいきますと成長いたしまして、（結婚して）親子で花火を起しているのも微笑ましいところがございます。記念すべき第1巻の第1章ここで“釣りが馬鹿誕生”ということになります。画面のほう見にくいのですが、ここに文字が入ってますけども、“この浜崎伝助が釣りが馬鹿といわれるようになったのはつい最近のことです。それまではごく普通の会社員だったのです。”という件からはじまりましてこの作品がすすんでいくわけです。皆様よくご承知の“合体”，この2文字に人生のすべてがあらわれているのかなと思うんですけども、テレビ、映画、DVD等を含めましてすべて先生の作品を使ったもの、“釣りが馬鹿日誌”もずいぶん進みまして映画のほうもあちらこちらで上映されておりますけどもかならずそのシーンはこの2文字ですましていると。そのへんが作品の味わいを出しているところだなあと感じております。

つづきまして、河口仁先生です。河口仁といえば昭和生まれのかた、このなかには平成生まれの方は非常にすくないと思いますが、昭和生まれの方は何となく“愛しのぼっちゃん”と私のかと思えます。“愛しのぼっちゃん”はコミックスで全8巻出ております。残念ながら私の手元にあるのは6巻までしかないのですが、6巻までは写真でご紹介申し上げます。よくよく見るとなんとなく愛嬌のあるこの顔どっかてみたなあと。これはプロレスラーのブッチャーってご存じですかね。ジャイアント馬場とかアントニオ猪木とか、彼らが現役でやってきたときにいわゆる悪役で出てきたレスラーですけども、のちほど河口先生からもご紹介いただけますかと思えますけども、本当は非常に人のいいおじさんでございまして、そんなところを書かれた漫画だなあと感じております。あまり画面で紹介してしましますと出版社から苦情がきてしまうんじゃないかと心配しております。ちなみにアントニオ猪木はアントニオオイノバエスとして出ております。ジャイアント馬場はジャイアント幅という名前で登場しております。で、最近の河口先生なんですけど、3月11日ご承知のとおり東日本大震災がございまして、私どもの施設も先ほどの所長からのお話にもありましたように避難所として3月13日からピークは400人を越える方々を引き受けして避難所をやっておりました。当然ご高齢の方、ご家族の方、ちいさいお子さんいらっしゃる方もたくさんいらっしゃいます。心豊かに避難暮らしをできるようにということで河口先生、非常に交通事情もままならないところをおいでくださいます。子ども達のためにはお絵かき教室、ご高齢の方のためには絵手紙教室といったものを毎日毎日展開していただきました。そのなかで河口先生、東京にお帰りになりましたから私どもにこれをほぼ毎日、こういった絵手紙を送っていただきました。避難してきた方ももちろん我々職員もとても心が温まるありがたい贈り物でした。

つづきまして寺島敬治先生をご紹介させていただきます。作品としては“あららんけちよ”etc.とこれも昭和生まれの方は“あれ、聞いたことあるぞ”というところであろうかなと思えます。まあ“タロコさんというこさん”が最初にでましてやっと表紙だけは見つけることができましたが、ちょっと中身をご紹介できる状況でないのですが、右半分にございます“漫画ナンバー1”という季刊紙というのですかね。なんですけど上の段左から2番目サングラスをかけているような絵のところこれが赤塚不二夫先生でございまして、この本日おいでいただいたお産人様ともに赤塚不二夫先生のところにいらっしやったというところがお三人の始まりなのかなあというふうに思っております。で、寺島先生、その後の単行本ですが“あららんけちよ”。これが表紙。なかもちょっと開いてご紹介申し上げますが、在りし日の赤塚先生の漫画を彷彿とさせるようなそういった展開でございます。で初版掲載が少年サンデーなんですけど大型新連載ということで藤雄プロダクションにいらっしやったところにお書きになられたそうです。

今日の鼎談に移らせていただきます。タイトルは“青少年期の体験から生まれる漫画の世界”ということでございます。先生方にはなにかとお含み置きいただきまして進めてまいりたいと思えます。よろしく願いいたします。

それではただいまより鼎談のほう進めさせていただきます。さっそくまず先生方からご挨拶を頂戴したいと思います。最初に北見けんいち先生よろしく願いいたします。

北見氏：北見けんいちです。僕はテレビとかこういった会談とかが苦手で全部お断りしていただいていたので、大樂さんの強いおすすめてあと北見けんいち本名です。でうちの先祖が会津というのは父親から聞いて知っていたのですが、この辺に北見家のお人が多数おられるというのを聞きましてこれはルーツかということもありまして、今日お恥ずかしながら参加させていただきました。よろしく願いいたします。

大 樂：北見先生から今お話があったように最初ですね、なんとか講演してくださいとお願いしましたら、向こうから“やらないよ”と“講演はやだ”と。実は私ちょっと寺島先生と旧知の間柄なので“寺さん、こまったねえ”という話をしまして、それで今日の件の話となるわけです。それは後ほど寺島先生からお話いただけるかなと思えます。つづきまして、河口 仁先生お願いいたします。

河口氏：こんにちは。河口です。出身は山口県です。普段は埼玉に住んでいます。友達に言われました。こっち方面にくるときは山口県出身とだけはいふなよと。どうぞよろしく願います。

大 樂：では、寺島先生よろしく願います。

寺島氏：どうも寺島です。よろしく願います。簡単ではございますが。生まれは福島県です

大 樂：本人こういった感じなんです。俺寺さんとつきあって何年になるかな。

寺島氏：何年になるかな。30年くらいか。

大 樂：そうだな。はたちには一緒にいたからな。

寺島氏：そうか。四半世紀以上になるのか

大 樂：昔からこんなやつでして、なんで漫画家になりたかったのか後で聞きたいと思いますが、気がつくといつも一緒にいるんですね。僕はこうまっとうに生きてきたんですけどね。結婚もし、子どもも作り…

寺島氏：まっとうねえ

大 樂：まっとうでしょう。

寺島氏：まっとうだね。どちらかというね。

大 樂：そのころからつきあいなんです。しゃべり始めるとなかなか止まらないんだけどね。しゃべり出さないよね。なかなかね。でわ、私のほうから先生かたにいろいろ聞いていきたいと思えます。河口先生って失礼ですがおいくつですか

河口氏：38です。市役所いったらまたちょっと違うんですが…。年齢なんてね。自分で決めればいいんです。以前母が脳梗塞で倒れてね。入院していたときに6人部屋に。あ、この話してよかったです。

大 樂：あぁ結構です。

河口氏：そんなときにね。6人部屋に、近所の田舎のばあちゃんたちが入院していてね。そのばあちゃん娘さんとかお孫さんが見舞いにくるんですよ。そんなときはばあちゃん役をやって。そんなときはばあちゃん76、7才のばあちゃんをすっかりやっている。で、娘さんとお孫さんが帰るでしょ。したら、一人の女の子になっちゃ。それを僕はそばで見ていて、あぁ年齢っておもしろいなって思いました。すばらしいでしょ。いくら年が80だろうと90だろうとそのとき話しているエピソードが7才の時の話をしていたら、そのばあちゃん7才になってるの。確実になってますよね。したら、俺も好きにしたらいいんだと。で、現在38才。

大 樂：寺島先生はいくつでしたっけ。

寺島氏：61ですね。

大 樂：8つちがうんですね。僕が高校生をやっていた時にはもう漫画家さんをやっていたので。そうですね。そっかそっか。北見先生っておいくつでしたっけ。

北見氏：昭和15年なんで、今年71才になります。たぶん一番年上なんじゃないかなと。

北見氏：今はもう無い国なんです。満州国心境特別地区ってかつてに日本が作ったところなんです。うちの父が印刷の技術者だったんですよ。転勤で東京から満州へ渡りまして、昭和15年に僕が生まれて、同時期に昭和21年に引き上げて、舞鶴経由に板橋に帰ってきたんです。古い話はちょっと無理です。

大 樂：じゃああれですかね。ちょうど6才のころにこちらにお戻りになられたんですね。

北見氏：満州にいたときの記憶はすくないんですけど、日本に帰ってきてからは、日本が一番ひどいときだったものですから覚えております。あたりは焼け野原でしてね。父親はそのまんま現地召集で8月10日に召集令状が来ましてまゝ19日終戦でそのままシベリアに抑留されてしま。そのとき母親と僕と弟と三人で引き上げてきたんですけども、母親はいつでも死ぬるように青酸カリを持ってまして。そういった状況で帰ってきたんですけども。まゝ皆さんそうだったんですけども。で帰ってきたら板橋の母親の実家が焼け野原で、掘っ立て小屋っていうんですけども廃材で作った小屋で8人くらいいて、どうしようもなくって“あかざ”っていう雑草があるんですけども、それがちょっとほうれん草に似ているものでそれを炊いて食べたり、ザリガニを捕って食べたりそんな生活をしていました。その辺の記憶はかなり聞かれば話せますね。

大 樂：それはこれからお伺いさせていただきます。ちなみに河口先生の5才ってどんなだったんですか。

河口氏：情けない子でした。ほかの子からは確実に外れていてぼーっとしている子でした。たとえば幼稚園にいったんだけど、入園式の時にほかの子たちは先生に“前に集まってください”っていわれるといくんですよ。で、父兄は後ろのほうにいて見ているんですよ。で僕は前にいけなくて。泣いて後ろにいるばあちゃんのほうへかけていって“いやだー”って泣いているような子でした。

大 樂：じゃあ、シャイだったんですかね。

河口氏：シャイ？そんな上等なものではなかったですね。

大 樂：今は全く人前にでることが平気ですよ。

河口氏：やっぱり人前でしゃべるといふことは楽しいですよ。これはみんなそうだと思うんだけどな。

寺島氏：そんなことない。

大 樂：寺島先生は？

河口氏：漫画書いたりするのは、このお二人と一緒にして。しゃべらないくらい書くしかない。そんなもってあるところまでいくと漫画のなかでしゃべるっていうこととこういうふうにならざるまゝ皆さんのまゝで話をすることが同じじゃないかって気がついたことがあります。それから、まゝ恥ずかしいということもあるけども、自分以外のひととコミュニケーションをとるといふことは同じだと思ふようになりました。

大 樂：作品のなかでコミュニケーションをとったり、今は少し38才になって成長して言葉でコミュニケーションをとったりするようになったんですね。

河口氏：十年前からですね。コミュニケーションの話をしたけども。植物をスケッチするためにいつもこう持ち歩いているんですけどね。植物、まゝ人間じゃないけど。植物とコミュニケー



ションをとってるなあって自分で感じます。

寺島氏：危ないんじゃないの。

河口氏：畑のネギとかね。毎日のように通っていますとね。成長しているのがわかるんですよ。農家の方がよくご存じでしょうけど、それはネギを鉛筆で書いていくってことはネギの言葉を聞いている。ネギが話してくれることを聞く。という作業だとなつて僕は思うんですよ。

大 楽：じゃあ、河口先生は植物系男子。実は僕も家で畑を作っていました、今年は震災で放射線量が高くてやっておりますけれども、いま河口先生がおっしゃったようにネギが育つていうのは、毎日見ていると見えますね。正直に言いますとね。また育っている。まただというのが、日に日に見えて来ますね。まあかといって私の場合はスケッチなどしないで鍋にぶち込みますけどね。

河口氏：そりゃネギもよろこんでますよね。

大 楽：寺島先生はどんな子だったんですか。

寺島氏：5才のときですか。やっぱり河口先生と同じで落ちこぼれですよ。その時点で。

大 楽：どんな感じだったんですか。

寺島氏：人と同じことをできなかつたりだとか、今もそうですけどね。今は冗談じゃなくて本当のことです。

大 楽：北見先生、先ほど終戦後の焼け野原のお話をされてそのへんから“焼け野原の元気くん”につながっているんですかね。

北見氏：そうですね。僕は二人と違って割りと一生懸命生きてほうで。小学校だけで5回転校しているんですよ。それであと無理矢理母子家庭なんで母親と弟と。でお袋が進駐軍だったんで、そこでちょうど朝鮮戦争がはじまったころなんで、拳銃磨いていた職についていて、小学校1年のころ母親が帰ってくるころ七輪に火をおこしてやかんにお湯を沸かしていたという記憶がございます。今の小学1年生ってそんなこと到底できっこないじゃないですか。よくやっていたなあと思います。泥棒もやっていましたよ。というのですね。当時普通の生活がいっぱいいっぱいで大人も子どもを見る余裕が無いんですよ。で子どもは子どもの社会があつてガキ大将というのがいまして6年生くらいの年高の子がいまして、麻の袋がありまして、僕は当時1年生ですよ、そばに電線を作っている工場があるんですよ。そこに廃材がでるんですよ。壁のところに小さな穴があつて小さい僕が、いまでも小さいですけどね。それで電線をとりとめて山にしてあるところに忍び込んで廃材を取ってきて外に投げるんですよ、それを仲間の上級生が麻の袋にみんな入れて、見つかったらあつと逃げるんですよ。大人はそんなところには入れないんですよ。それで逃げおおせてね。それを集めると銅線の塊になって、それをクズ屋さんところについて電線が1貫目80円になるんですよ。その分け前をもらっていました。それが小遣いみたいなものでした。それを母親に渡しておりました。

大 楽：当時の金額でいうと結構な金額ですよ。

北見氏：今でいうと5000円くらいですかね。そんな生活をしていました。ぼくの5才6才のころは。転校するたびに当然いじめられるんですよ。そこでいじめられっ子で終わっちゃうとお二人みたいになっちゃうんだけど。まいどのことなんですけど、転校する日に生意気でもなんでもないんだけど“おまえ生意気だな”ってなるんです。じゃあ“やるか”となってケンカになって。それで私は臍腹にかみついでいたいそれで相手は泣いてしまうんですけど、それでいくつもの小学校を制覇して、あいつは怖いみたいなことになって。そこでいじめられっ子で終わっちゃうことに、まあ貧乏だったってことでよけい反骨心があつたのかもしれないですけど、今考えると無茶だったなと思います。一人で五人くらいとケンカしたこともあります。

大 楽：昔はあれだったんですよ。まあ私の世代もそうなんですけど。普通に友達同士でケンカして殴る、蹴るはありましたもんね。

北見氏：蹴るはいけない。少年ぐらいまでは。ものをもっちゃいけない。ものをもっちゃうと敵同士でも“おまえずるい”ってなるんです。だから素手でなくちゃいけない。

大 楽：それは一緒ですね。昭和33年では蹴るがOKになっちゃいましたから。ルール改定です。その間はどうか。

寺島先生はどうですか。

寺島氏：(ケンカは)してないですからね。

北見氏：幼稚園って聞いてびっくりしちゃいました。僕らの世代は幼稚園ってないですからね。

寺島氏：そうですか？

北見氏：あつたかもしれないけれど、俺の知っている人たちにはいないかなあ。なにげに

河口先生は良家のおぼっちゃんだからな。

河口氏：幼稚園なんて聞いてないですよ。幼稚園が始まりだしたころなのかなあ

北見氏：昔からあつただけで、戦後ある時期はそんなに・・・地方と東京は違うかもしれないけれど

河口氏：ああ地方と東京では違ったのかも。

大 楽：寺島先生のときはどうですか

寺島氏：幼稚園？ありましたよ。通ってました。

大 楽：私ももともとは高校の教員でして、工業高校の電気科の教員だったので、生徒達に電気工事の試験課題として電線剥きをやらせていたんですよ。それで、その練習で出る切れ端を袋に集めていてね。もう時効だからいいと雄門ですけども、私が教員になった昭和56、7年頃のお話でして、廃品回収業者に回収させてキロ20円くらいだったかなあ。

北見氏：終戦直後のほうが価値が高つたんですよ。昔はね馬蹄形の磁石があるでしょ。それをひもにつけて引きずってあるいて釘なんかも回収していたんですよ。子どもながらに必死に生活していましたよ。

大 楽：遊びながらでもなんとか生活をしようとして努力していたんですよ。そういう知恵があつたんですよ。そんな初年時代をすごしながらもだんだん当然成長していくわけで、青年期といえますか、どんな感じだったんですか。じゃあ寺島先生から

寺島氏：青年期？ええ落ちこぼれだったかなあ

大 樂：ほかにないんですか？  
寺島氏：どこまでいっても落ちこぼれ。  
河口氏：正直だねえ  
寺島氏：うん  
寺島氏：進行表をみたらこれからなんで漫画家を目指したのかってきかれるわけでしょ。  
大 樂：そうですね  
寺島氏：正直なんで正直にいいますと、普通のことができないんで漫画家になったっていうのがあります。  
大 樂：一芸に秀でてたわけですね。  
寺島氏：まあよく言えばね。  
北見氏：僕が一番意見がいえるかと思うんだけど、運だけでここまで来たようなものなんでね。運も大きいよお。  
大 樂：私、先ほど皆さんに見ていただいたスクリーンで先生方の紹介の漫画のページに写真なんかをめくりながら見ていて、ああこれ性格がでていいるな、なんて思いながら見ておりました。私が言うと先生方3名に失礼かもしれませんが、北見先生がダイナミックなんですよ。これが、北見節なんですよ。仁先生の絵を見てみると線が結構雑に書いているようで繊細なんですよ。本当は細かいんですよ。寺島先生のお書きになる漫画の線って正確なんですよ。あとで気になる方はご覧になっていただければと思うんですけども。非常に線一本一本の太さなんか正確さがでていて一言で言ってしまうえば綺麗な絵をお描きになるなという印象を昔からもっております。性格なんですかね。  
寺島氏：それはあるでしょうね。性分と申しますかね。  
大 樂：じゃあ、仁先生はなんで漫画家になろうと思われたんですか？  
河口氏：もう漫画を書き出してから（そのことを）人に聞かれたことがない。寺島さんが“きっかけは？”って同じように聞かれて、ほかの仕事ができないって。（私も）小学校のときもそうだし、中学、高校あのへんもずっとね一般の仕事ができないって思っていて、その質問した人が一言“河口さん、あんた漫画書くこと以外やりたくなかっただけなんだよ”っていわれたんだよ。そのとき僕は“ああ本当にそうた”って思ったんですよ。そこで、そうだって思ったのはほかのことがやりたくなかっただけなんだよ。どうでしょう、寺島先生？  
寺島氏：いや、ありません  
河口氏：中学、高校のときとかほかの仕事ができないって思った理由は、性格もあるし、体調も胃腸が弱かったり、体の状況がいくつかが自分でいえるのがあった。だけど、あとで思うに体の条件がどうのこうのよりもただ漫画が書いてみたかっただけ。そっちの気持ちが体に勝っちゃったってのかな。体がかってに理由付けしてきたような節が感じられるんですが。いかがでしょう。寺島先生。  
寺島氏：まあまあ、そういうことです。  
大 樂：僕が16の年に寺島先生と最初にあったので、僕が16だと寺さんは24？  
寺島氏：24  
大 樂：そのころはビデオカメラって、あのころは8mmだね。片手によくそのへんを歩いていまして、いまでいったらストーカーですよ。それで撮影してました。写真をとったり。あれはなにか意味があったんですか？  
寺島氏：意味はないでしょう。そんなのは。  
大 樂：写真はよく撮ってましたよね。  
寺島氏：意味のあることはしてこなかったですね。  
大 樂：（鼎談の）テーマを考えて…  
寺島氏：あ、そっか。まあ気をつけないとこんななっちゃうということ。  
大 樂：北見先生すみません。苦しいときの北見先生ということで。私もこれは人から聞いただけですけども、北見先生は写真屋さんをやったということ。  
北見氏：僕が高校を卒業するとき、昭和33年なんですよ。長嶋さんが巨人に入団して、そして王さんは僕と同じ年なんですよ。ちょうど東京タワーができてきたときで、そんな世代なんですよ。漫画も好きなんですけど、写真も好きで、僕写真部だったんですよ。うちは高校でたらず就職っていうのは割と流行っていきまして、日本ゼオンに入社したんですけども、この業務がいやになっちゃって、2ヶ月でやめちゃったんですよ。それで、予備校へ行って試験のない多摩芸（多摩美術大学付属芸術学園）っていうんですけど。そこで写真で身を立てようと。写真屋さんですから。それで計画に入れて、なんでも好きなんで、漫画も書いていたんですけど、実際20の時に写真屋をやったんです。ただ、こんな若いのが写真屋をやると女の子がいっぱいくるんですよ。ていうのもその町に喫茶店というのが無かったんですよ。写真店にもインスタントコーヒーというものがあって、みんなに振る舞っていたんですよ。そうすると若い女の子や男子高校生がくるんですよ。そうするとただ来ただけじゃ悪いと思って写真の仕事を持ってくるんですよ。高校の運動会とか行事のたんびに何十本とフィルムをもってくるんです。それで寝られない日が続いて確かにあのままやっていたら、生業としてなりたっていたと思うんですけど、それでも漫画を書いていたんですけど、やっぱりやっていきたいなああと22の時に小学館に持ち込みまして、たまたまそのころ赤塚不二夫先生がおそ松くんで人気が出てきたときにアシスタントを募集していたんで“きみ、おとなしうだから、合うかもしれない”と。で、（会いに）行ったらすぐ採用で。正式には昭和39年東京オリンピックのとき、そのときに赤塚不二夫先生のところにお世話になり始めました。それ以来、20年ちかくアシスタントをしたのかな。お二人は赤塚先生のところでもアシスタントになってないんですよ。お二人は適宜と申しますかね。うちの職場にはいませんけど独立した形で。で、僕は先生のアシスタントでこつこつとね。アリとキリギリスみたいなもんだな。話を変えればウサギとカメというか。二人のほうが圧倒的に早くデビューして売れたと思います。僕よりも10才ちかく若いのにちゃんと連載をもって。だからそんなに悩んだり苦しんだりというのはないんですけども。それで赤塚先生のところの仕事が忙しかったんですけども、40才で次の仕事きたんで、ほとんど30年近くたっていたんじや

ないかと思ひます。分かんないもんです。人間って。

大 樂：先生がちょうど写真屋さんが始まる昭和33年に私は生まれたんですけども、

北見氏：33年は高校を卒業した年で

大 樂：あゝ高校を卒業・・・、その時期に“オールウェイズ3丁目の夕日”あれがちょうど33年なんです。東京タワーができた年です。

北見氏：そうなんです。ただあの映画だいぶ嘘なんです。あの当時の東京はもっと交通量があって、自動車も走ってましたから。

大 樂：そうなんですか。

北見氏：昭和20年終戦でしょ。10年後には東京はだいぶ復興していて昭和30年頃からはや戦後ではないっていわれていて。

大 樂：僕が以前先生にお会いしたのが2006年で先生はいわきの小名浜においでになられて、あのときに寺島先生が昼間に僕の職場に電話をかけてきて“北見さんが来ているから一緒に行かないか”っていわれて、僕そのとき学校の教員をやっていましたから高校を抜け出して、一緒に行きまして、お会いしたんですけどね。いわき市にこないだの津波でずいぶん持って行かれました、(皆さん)ご承知かと思いますが、原発のほうの収束がいついいつになるのかなあと思っているんですけど先が見えないところなんですけども、先生の感じですと戦後昭和20年から30年の間で日本が復興した・・・

北見氏：復興した形をとればね。ただ今回の原子力まではぜんぜん桁違いというか。でも広島もこの間行ってきたんですけども、全然ね、すごい街になっていて。

大 樂：河口先生はどうして赤塚先生のところに行ったんですか。

河口氏：高校を卒業して山口県から上京してデザインの専門学校に入ったんです。グラフィックデザインってやつで。ポスターだとか印刷物の。4年間だったんだけど3ヶ月くらいでもう学校に行かなくなっちゃって、それで2年に進級できないんだけど、なんとかいきましてね。もう一年遊びたいって思いました。で、2年たって友人たちが就職していったんだけど、自分は？ってときになにもできなかった。そのときには漫画家になるって決めていたんだけど、実力が全然伴ってなかったんです。で、一回田舎に帰って一月くらい家にいた。で“おまえどうするんだい”って親に言われて、その時の自分はね、どうするんだいっていわれても答えが出てこないんです。で、何回かいわれたんだけど、やっぱり頭がぼーっとしてまして、あんまり家にいることもできないし、とりあえずもう一回上京してきたんです。で赤塚先生の事務所に原稿をもってアシスタントでもなれねえかくらいの気持ちでいったら、ちょうど席がひとつ空いていたんです。あの“モーレツあたるう”って漫画ありますよね。それが終わった直後くらいでした。で、入れていただいたんです。ちょうど前後して寺島先生もいらっしやうと。

僕は昭和24年生まれで寺島さんとほぼ同じくらい。“愛しのぼっチャー”っていう漫画を始めたのは29のときでした。最初は“漫画No1”って赤塚先生が出していた漫画の別冊に8Pほど(書きました)。それがちょうど24位だったと思います。その前に短編ものをちょこっと書いていたりしてました。連載までにはほど遠い日々でした。不二夫プロは28才まででした。で、その間寺島先生とか、北見さんとか、遊んでもらいました。不二夫プロに入ったのは21才のころで、28才までの7年間いました。後になって振り返ってみたら、寺島先生とか北見先生とかが俺の先生だったって思っています。後振り返ってみたら

北見氏：当時はそう思ってなかったの？

河口氏：考えてみたこともなかった。そういえばさっきカメラの話が出たでしょ、写真の話。まるっきりだめな人間だったんです。それは寺島先生はおもちゃのようにカメラを扱っていたんです。普通だと記念写真、お正月だからとか、旅行だからだとか写真を撮るっていうんだけど、寺島先生はね、いつでもどこでもカメラを持っていて、何でも撮っていたんです。それを見て、あゝシャッターっていうのは好きな時にかかって押せばいいんだって勉強しました。だから師匠でございます。

大 樂：無口なアホの師匠はなんで漫画家になったんですか。

寺島氏：なんで？

大 樂：長い付き合いだけどそこは聞いたことがないな

寺島氏：俺はね、あゝ私はですね、幼稚園のころから漫画家って決めていたんですよ。

大 樂：なんで幼稚園のときに決めただろう。

寺島氏：さあ。

北見氏：僕も小学校のころに漫画家って決めてましたよ。

大 樂：そうですか。

寺島氏：仁さんは。

河口氏：やっぱり小学校のころ

北見氏：なにがよかったって、子どものころの夢がそのとおりになったってことだよ。

大 樂：その頃の子どもの夢って半分くらいがパイロットですよ。俺もなれなかったです。じゃあ寺島先生は迷うことなく。

寺島氏：そうですね。

大 樂：北見先生は途中写真屋さんになりましたよね。

北見氏：まあ好きなことが多かったんで。でも赤塚先生には“おまえ下手だから漫画をやめなさい”っていわれたことはありましたよ。30を超えたところでそんなこといわれてもって思いましたね。で頑張った。

大 樂：そうすると割合遅咲きってことになるんですかね。

北見氏：そうですね。でも(業界に)入ってきたのが23で入るっていうのがこういう業界だと遅いっていうか。で40からメインの連載が始まるっていうのはちょっと遅いですね。まあ逆にまだやっているっていうか。また遅いと忍耐強いっていう気質が、先祖のDNAにあるのかもしれない。

寺島氏：そういうのは感じますよ。

北見氏：二人と違ってまじめですよ。おもしろいことがあんまり言えないんですよ。  
大 樂：おもしろいですよ。  
寺島氏：最初お会いしたときに北見さんが不二夫プロにいらっしゃるってことが不思議でした。不二夫プロってはやめめちな人が多いんだけど、北見さんは普通だった。  
北見氏：血液型のせいかな。寺島さんの血液型は  
寺島氏：B  
北見氏：漫画家のメンバーでA型なのは知っている限りで、赤塚先生と僕とさいとうたかお先生の3人くらいしか確認されてません。あとABかBなんですよ。血液型はいい加減なんですけどわりと信じているところがあって。  
河口氏：赤塚先生はA型ですか。あの先生は几帳面だもん。ものすごく。すみませんね、先生。不二夫プロに入ったときに、不二夫プロに入ってすぐに赤塚先生が教えてくれたことは、原稿用紙があるでしょ、で、“吹き出し”って言って、台詞の部分があるんですけども、その台詞の部分を書くときに定規でミリ単位で文字数と文字の大きさをミリ単位で吹き出しの大きさを決めるっていう話をしてくれました。だから以外と余白が空いている。  
大 樂：今はパソコンでやりますけど、昔は写植でやりましたからね。  
北見氏：そこに活字を埋め込んだんですから。吹き出しを切り抜いてそこに鉛の活字があるでしょ。あれを束ねてそこに押し込んだんですから。それで判をつくっていたんですよ。  
大 樂：今だと1Pにある程度組んでいければパソコンでいけますからね。昔はじゃあ人海戦術ですね。本当に。  
私も一度だけ赤塚先生にお会いしたことがございまして、50を過ぎたいい大人がマジックで顔に絵を描いて東京の真ん中で電柱に向かって小便をしているんですよ。で見てたら先生が振り返って“何見てんだよ”って。そりゃ顔にマジックで眼鏡を書いている人が立ち小便をしていたら凝視するでしょって。そのときは寺島先生に用事があったときだったんですけど。とにかくインパクトが凄かったですね。  
北見氏：はじめはそういうのが無かったんですけど、お酒も飲めなくてね。僕が23で入ったんですよ。そのときに全然飲めなかったんですよ。そのときフルヤさんとか5、6人男の人がいて“北見くん、ちょっとお酒を買ってきて”っていわれて、6人いて、じゃあ俺一人ではお酒が持てないかなって思って、ビール3本と、ちょうどクリスマス時期だったんでフジ屋のお子様シャンパンで、その会は持ちあったんですよ。それくらい弱かったんです。それから先生の人気が出てきて、マスコミとかも来るようになってくると、もともとサービス精神旺盛な方だったんで自分がキャラクターにならなくちゃいけないって使命感じゃないかな。晩年はそれができあがっちゃってあんな感じになったんじゃないかな  
大 樂：私はバカボンのパパ、あれを見ると赤塚先生本人じゃっていつも思うんですよ。寺島先生はどうやって赤塚先生のお家にいたんですか。  
北見氏：彼は呼ばれたんですよ。優秀なんで。  
寺島氏：えーっと、おそ松くんクラブってファンクラブがあって、そこに入ってたんですよ。それで会報が毎月送られてきてそこに似顔絵を送ったんですよ。それとアシスタント募集っていう広告が出てたんですよ。それで原稿を送ったら、来てくださっていわれて。  
北見氏：二人は絵がうまいっていうのは不二夫プロでもあったんですよ。それも短い期間だったね。  
寺島氏：赤塚先生にやめたらっていわれたんですか。  
北見氏：そうなんだよ。見てみてたらわかるけど、僕の漫画ってギャグが無いんだよ。切れ味が悪いし、絵がもたもたしているし、“やめたほうがいいよ。”っていわれましたよ。で割とリーダーコミックとか漫画アクションとかで仕事をしていて、赤塚が知らないうちに釣り馬鹿が人気が出てきたっていわれるようになったら“彼は違うと思っていた”って。本当かよって。やめるっていったでしょって。  
寺島氏：編集者からは言われたことはあるんですか。  
北見氏：それはない。その人は本当に違うって思ったから。  
大 樂：寺さんはあるんですか。  
寺島氏：あります。田舎帰って畑耕したほうがいいよっていわれました。畑ないんだよ、うち。  
北見氏：けっこう漫画家って残酷ですよ。こういう仕事だから。  
大 樂：河口先生はないんですか。  
北見氏：いや本当に耕しに戻ったやつもいるよ。  
河口氏：無いなあ  
北見氏：(言われても)気にしないんじゃない。  
寺島氏：気がつかなかったってことですか。  
大 樂：北見先生、(漫画を)書いていって釣り馬鹿を始めたんですか。  
北見氏：それが変な縁があって。小学館の編集者がいるんですけど、野球を、当時草野球をやっていたら、助っ人でいった試合の相手が小学館で、釣り馬鹿に使ってくれた編集者がいて、ここで会うのも何かの縁だからって、僕は(当時)カットって言って、小さい絵をやっている、(編集者に)仕事あるけどって、(僕は)何かカットくらいあるのっていったら、相手ページがあるよって言って魅力的だなあって思って、食堂で改めて話しを聞くと、やまさき十三って原作者がいて、原作はできていて釣り漫画。で作家の候補が4人くらいいるんだけどって言って、その編集者は昔石ノ森章太郎さんのアシスタントをやっている、ときわ荘流れで赤塚調というかそういう漫画っぽい絵で釣り馬鹿をやりたいって言って。はじめは釣り馬鹿は純劇画調のなんとかさんと3人くらい候補がいてその編集者が僕のことを強く押しつけてくれて、増刊号から始まったんですよ。1回2回は普通の成績だったらしいんですけど、3回くらいからその増刊号のなかでは人気が出てきて、本誌って普通の本にお休みになった作家さんがいたらしいんです。で急遽増刊から作品を持って行かなくちゃいけないって。運がよかったですね。そのお休みになった作家さんはもう消えちゃったんですけど。代わりに釣り馬鹿が本誌に掲載されて、そこから連載漫画になったんですよ。当時はビックコミックオリジナルって雑誌が“はぐれ雲”っていう用心棒漫画と“あぶさん”、“三丁目の夕日”っていう漫画、その3本はぜったい堅いから釣り馬鹿

が始まってそれを抜けっこないから4番手につければ上出来だからそれで頑張れっ  
いわれて、最初の編集者が釣りが好きな方で、話を聞くと釣りにハマって家庭に捨てられ、  
会社に捨てられ、四国の釣具屋さんをやっていい人生だったって話があって、こりゃ書け  
ないなってのがあって、2番目の編集者はまったく釣りまったくできない人でそこで“ス  
ーさん”社長を出してきたんです。大きな会社だと一社員が社長の顔を知らないってのは  
あって当然だろうってことでそういう設定を作ったら急にさっきいった3つを抜いてトッ  
プになってちゃって。それで今に至るんですけど。その十年後くらいに映画、三國廉太郎さ  
んと西田敏行さんのでまたヒットして、まあ映画のおかげがすごいですけどね。

大 樂：じゃあはやまさき先生と会ったのはそこが初めてですか。

北見氏：草野球の相手チームにいたりしてお会いしてました。まさか一緒に組んでやると思っ  
ても見ませんでした。年も一緒なんですよ。そんなんですけど人生やってきたんですよ。父親  
も過酷なシベリアから帰ってきてね。まあ父母二人とも早死にしてみましたけどね。

大 樂：河口先生はなんで“ぼっちゃん”を作ったんですかね。

河口氏：きっかけは高校生の時に漫画書いている仲間がプロレスが好きで男がいたんです。僕はプロ  
レスに興味がないんだけど、高校生の彼がプロレスのことを話すとものすごく熱くなるん  
です。僕は興味がないからふんふんと聞いていて、周りを見渡すと、そのころ大人達は  
(プロレスなんて)あんなものって言い方をしていたんです。あんなのインチキだよって。  
何本気になっておもしろがっているんだって。で僕にしたら興味がないから、そういう大人  
達とすぐそばの友達がこう熱くなっている、その間に立ってこれは何なんだって一緒になっ  
て友達と見出したんです。最初のころはおもしろいとは思わなかったです。で、ずっと見  
ていくうちにあんな人間のおもしろさだっただけで僕なりに気がつきました。だから殴ったり、蹴っ  
たり、血を出したりとか、ストレス発散だとか、そういう風なのは全然なかったです。基本  
的に今もそうです。人間がやることだから、例えば、野球を好きな方だったら、野球を見て  
いってあいつはこうだ、この選手はこうだって人間のおもしろさが見えると思うんです。  
それを僕の場合プロレスを見て、感じがしたということですね。不二夫プロをやめたのが2  
8になったばっかの時で、時間がたっぷりありますからね。そのとき一人でプロレスを見に  
行ったんですよ。日本だとあだこうだと、インチキだ、八百長だと言われていて、例えば  
プロレスはアメリカから入ってきたんで、そのアメリカに行ってその地元のお客さんと一  
緒に見てみよう。で、テキサスのアマリロってところで、田舎なんですよ。牧場がいっ  
ぱいあって、そこで一週間に一回プロレス会場にちっちゃい子から若いもんから、じいちゃ  
ん、ばあちゃんまでもが集まるんです。そういうなかでそのプロレスを見たときに、村祭  
りのようなものでもあるし、大変喜んでみんなわーわー騒いで見ているんですよ。日本で格  
闘技という、柔道とかそうゆうのとは別の感覚、文化が違うなと感じました。文化が違うか  
らそれをいきなりあだこうだと言えないなと、そういうのがふっと出ましたね。この旅を  
したから発見、あゝ発見という大げさなものではなくて、こうだったんだという感心をした。  
だからプロレスで漫画を作ろうかと思ったことはなかったんですよ。その後少年マガジ  
ンの五十嵐さん、赤塚先生の担当だった人のところで持ち込み原稿を持って行ったらプロレス  
のことをよく知っているし、改めて書いてみてって言われて書いてみたら、まあなんとか。  
それでも半年ほどいっぱい書いて持ち込んで、やり直しを繰り返しましたけどね。ちょうど  
その時期北見さんとか、あと何人かではほかのアシスタントさんと一緒にひとつの部屋を借り  
て。

北見氏：あゝそうだったな。

河口氏：だから、あの頃よく北見さんに食べさせていただきました。というきっかけかな。

大 樂：なんでブッチャーなんですか。

河口氏：好きなレスラーは何人かいたんですけど、漫画にして絵になるかどうか、自分が動かしや  
すいかどうか、で書いてみてたらコロコロとしていて体型も書きやすいし見てもまあ楽し  
いじゃん。それで書き出した。というのがありますね。

大 樂：やっぱりあれですか。アメリカ行って体験してみて日本の見方と違うなって感じられたわ  
けですか。

河口氏：ええ違いました。それまでプロレスっちゅうのは生きるか死ぬかとか殺すか殺されるか、  
極端な感じだったんです。僕らの世代では。それがひとつのお楽しみのお場というふうに変更  
して認識した。プロレスってそれそのものがおもしろいじゃないですか。なんかそれをあえて  
漫画にとは必要ないって僕は思っていたんですけど、ただ拡大してみたらいろんな人間を表現  
する場だなって思ってやりました。

大 樂：作者としての河口先生もいっしょに漫画からみた周りの世界というんですかね。人  
の世界というんですかね。それをこう表現するというのはひとつの漫画の表現の考え方とい  
うんですかね。

河口氏：漫画を書いていて読者の人と一緒に楽しもうよってという感覚なんでしょう。

北見氏：うちはまず読者からのリアクションの多い部分と自分が楽しんでいるんだけど読者がそれ  
を見てどう感じるのかとかね。いうのが書いていて一番思っている部分です。人それぞれで  
すもんね。

河口氏：基本そうですね。お客さんに楽しんでもらいたいっていう。

北見氏：お客さんっていう意識じゃなくて、周りの読んでもらっている人がすこしでもよろこんで  
もらえれば俺も嬉しいなと、それは赤塚不二夫先生がそうだったから。まあ自分が楽しい  
から書くと、人はどうでもいいやっていう人もいるけどね。

寺島氏：それでもおもしろければいいと思うんだけどね。

北見氏：そうなんだけどもね。

大 樂：寺島先生はなんで“あららんけちょ”をお書きになったんですか。

寺島氏：一応身近なことやってみないかっていうことで話が来てそれで始まったってのがあ  
るんですが。

河口氏：いくつものときだったけ。

寺島氏：24のときかな。

河口氏：あのころ俺寺島先生がすごくうらやましかったもん。うわーもうデビューしている。おもしろーいって同じスタジオのなかで。

寺島氏：俺も早かったけど終わるのも早かった。

河口氏：こんどいつ始まるの

寺島氏：来年

河口氏：来年だそうですね。

北見氏：うちのプロはね。よそのスタジオと違ってかなり漫画家を輩出しているんですよ。

大 樂：私も割合後になってしまったんですけどよしこ先生なんかもそうなんですよ。

北見氏：2, 3年一緒にいたこともあるけど。覚えてないかもしれないな。

大 樂：あれは意外だったんですけど。

北見氏：顔が分かんなかったもん。3年くらい一緒にいてね。ずーっと下を見てるんだもん。“おはようございます”って下を向いて。書いているのをちらっと見てみると凄くおもしろい漫画書いているんだよ。鳥居かずよしっていうのと、あとよしたに君って劇画のね。普通に手塚先生の弟子ってあんまり思い浮かべないでしょ。

河口氏：いい遊び場でしたね。

大 樂：やっぱりあれですかね。仕事も楽しんでやらないということですかね。

北見氏：そうですね。で、赤塚だけがそういう心意気をもってたわけじゃなくて皆がもっていたからね。

大 樂：磐梯の職場も同じようなものですね。北見先生、あれですか、釣りバカ日誌のなかではまさき伝助氏もそうなんですが、漫画のストーリーや中身云々じゃなくて人生観みたいなものを見てみると、ああ北見先生が日頃からおっしゃっている部分を顕示しているんじゃないかなとそういうふうに感じるんですけども。そのへんはいかがですか。

北見氏：おかげさまで、まあ先ほどいったとおり、ちいちゃいときから今までの体験してきたことを漫画にいらてはいます。

大 樂：おっしゃっていた満州からこっちに引き上げてきてからこんど電線を失敬しながら焼け跡の東京で暮らし始め、写真屋さんをはじめ、そのまま写真屋さんを続けていたらビルが建っていたんじゃないですか。

北見氏：いやいや、だめだめかわいい女の子がいっぱいネガをもってくとそれだけ無料でやってあげたりしてたから。失敗もいっぱいしていたし。経費が全然だめで。入ってくるお金全部使っちゃってたりしてたので。絶対破産していたと思います。

大 樂：これまで楽しくお話を伺ってきたのですが、やはり少し青少年体験活動フォーラムなので、これからの青少年とか教育に関わる方が会場にお見えになっているので、その方に青少年期の体験とはということをしつとめて一言づつ頂戴できればと思うんですが。

北見氏：僕らがいってもあまりためになるようなことは…

大 樂：先生、そんなこといわずに。

北見氏：じゃあ質問に答えるという形はどうですか。こんなことについてどう思いますかというような。もし何かあれば。

大 樂：これまでの先生方のお話を頂戴してさきほど北見先生がおっしゃったことがそうなのかなと私思ったんですが、さらっと言ってきたんですね。勝手にまとめに入って申し訳ないんですけども、いろんな経験のなかで育った部分というものは今先生がお描きになっている絵として表してくださっているんで、先生の漫画を読みたいっていう声は相次いでいるっていうのが現しているんじゃないかと思えます。読者の年齢というのは私世代か少し上がってところだともおんですけど。

北見氏：ビックコミックスオリジナルっていう雑誌の今の読者の平均年齢は50いくつで、それがいちばん高くて、次いでビックコミックそっちのほうが年齢が低くて。ビックコミックスオリジナルが一番年齢層が高いんですよ。

河口氏：不二夫プロにいて、そこをやめてアメリカに一人旅して、あれがずいぶんその後役立っています。旅、それも一人旅。今あんまり外に出ないから、旅行ブームっていうのが昔からあって何人かでの旅行はたくさんしているかとおもんですけどね。だけれども一人だと振り返って思えます。ときどき最近してないけどもときどき一人旅したほうがいいなって思います。自分で自分に言い聞かせています。実際今いろんなジャンルに友達がいるんだけど、世界中を一人旅してきた人間とかはコミュニケーションがよくとれるって実感しております。そうでない、旅行なんてしない、旅になんてでなかったってっていう人がいるんだけど、旅っていうのはその国その国で文化が違うんですよ。そうしたら困るわけ。その困ったところから自分なりの答えを見つける作業をしなくちゃいけない。だから探してしてくなく自分で答えを出していく、これ子ども達というかな、青少年の人たちにできるならそういう機会をもったほうがいいだろうなあと思えます。あともうひとつね。親とか教育者の方とかがいてよけいな話と思うかもしれないけども、もっと子どもたちをほめてほしい。もっとほめるという作業を日常茶飯事のことをほめてあげてほしい。子ども達を。教育って教えて育てるって書くけども、さっきネギをスケッチしたっていついたでしょ。あれは余計なことをしないで温かく見守る。実際ぼくは書きながら、やあまた大きくなったねとか言ったりもするんですけども、それね、人間にも言ってほしいと思えますね。だいたい寺島先生もそうですけども、ちっちゃい頃から怒られているような人間はいっぱいほめられているはずなんですよ。まあ寺島先生に限らず大きくなって大人たちみんなおじさんにほめられる場合もある。たくさんたくさんほめられているんだけど、忘れてしまうんですよ。

北見氏：俺は怒られたぞ、先生に。昭和15年生まれだから、軍国主義で怒られたんだよ。平手で張られて吹っ飛んだりして。べつにいやではなかったけどもね。怒るときに怒っても育つは育つんだよ。褒めれば付けあがるしな。怒られれば、僕だけ怒られたって恨まれるし。昔ね、そういう風に殴られて母親にいうとおまえが悪いことをしたんだっていわれてね、今は親も親だからねえ。

大 樂：私も子どものころはそうだったですね。寺島先生はまとめになにか。

寺島氏：まとめたって。無茶な。えーっとね。頑張りましょう。

## 2 事例発表の概要

### 事例1「あかぎ多文化共生推進プロジェクト」

発表者：国立赤城青少年交流の家企画指導専門職 山崎 栄寿 氏

参加者数：生徒 24 名 教員等 4 名

事業について

#### 1 事業のねらい

教育関係諸機関との連絡協力の下，外国人子女の日本語習得及び日本社会の文化・習慣の理解促進をねらいとして，体験活動プログラムを開発・実践する。

#### 2 実施期日

平成 23 年 10 月 8 日（土）～10 月 10 日（月）（2 泊 3 日）

#### 3 対 象

インスチット エドカショナル ジェンテ ミウダ校（群馬県邑楽郡大泉町）

#### 4 事業内容

本事業は，平成 22 年度は群馬県生活文化部国際課と共催で実施した。昨年度は主に「仲間作りプログラム」，「野外炊事」，「ネイチャーゲーム」等，本所のプログラムを宿泊を伴いながら体験し，日本文化に触れる機会の提供と仲間との交流を図ることを目的とした。実施直後のアンケート結果から，日本人との交流や野外での体験活動が希薄であるという実態も把握することが出来た。

本年度は，群馬県生活文化部国際課より外国人指導者養成を委託された N P O 法人オトナリサンとの共催とし，協力態勢を築いて企画・運営を推進した。

プログラムは，昨年度より発展させ，より多くの野外活動と日本文化の体験，そして日本人との交流を出来る場を設定した。

主なプログラムとして，キャンプ場泊・野外炊事（餅つき）ツリーイング（木登り体験）ネイチャーゲーム・子ども会との交流・うどん打ち体験等を実施した。

#### 5 成果と課題

##### (1) 成果

初めてのテント泊や餅つき体験，日本の子ども達と交流する場を設定し，昨年度よりも発展的なプログラムを実施することが出来た。

また，群馬県生活文化部国際課と N P O 法人と共催で実施したため，学校との連絡や当日の進行を円滑に進めることが出来た。

##### (2) 課題

多くの体験活動を取り入れたことにより，時間的な余裕がなかった。プログラムの精選をする必要がある。

また，在住外国人が地域に一步踏み出すための支援となるように，本所でできるプログラムの提供や外国人指導者の講師登録など，N P O 法人等と協力しながら日常的な多文化共生のための基盤を築く必要がある。

協議内容

参加者より，大変興味深い取り組みであり，今後様々なところでこのような事業が必要になってくるという感想等が述べられた。

## 事例2 「被災した地域の子どもたちとの交流事業」

発表者：国立中央青少年交流の家企画指導専門職 望月 省吾 氏

参加者数：16名

事業について

### 1 事業のねらい

- (1)震災や避難生活で傷ついた福島県の中学生と南三陸町の小学生の心を、同世代の仲間との交流により癒し元気づける。
- (2)富士登山に挑戦することにより、自信を持ち、困難な中でもたくましく生きる力を身につける。
- (3)被災していない地域の子どもたちが、震災や避難生活を送っている同世代の仲間に触れることにより、震災をより身近に感じるとともに、前向きに生きる気持ちを育む。

### 2 実施期日

「Jr.チャレンジ富士登山 - 福島と御殿場の中学生の夏の挑戦 - 」

平成23年8月1日(月)～5日(金) 4泊5日

「南三陸町の子どもたちとのサマーキャンプ - 今年の夏、生涯の友達をつくる - 」

平成23年8月17日(水)～23日(火) 6泊7日

### 3 対象

「Jr.チャレンジ富士登山 - 福島と御殿場の中学生の夏の挑戦 - 」

福島県の中学生男子19人・御殿場市の中学生男子9名、女子9名

「南三陸町の子どもたちとのサマーキャンプ - 今年の夏、生涯の友達をつくる - 」

南三陸町の小学校5・6年生男子10名、女子10名

被災していない地域の小学校5・6年生男子10名、女子10名

### 4 事業内容

被災した子どもたちにとっての「楽しさ」とは、「同世代の仲間との交流によって得られる楽しさ」と考え、被災していない地域の子どもたちとの交流事業とした。事業の中心を富士登山として、「仲間と支え合い・励まし合いながら富士山に登る」このような気持ちになることを指導のポイントとしたグループでの活動を中心に、仲間を思いやり、絆を深めるため、また自然への畏敬の念を持ち続けるために富士山5合目での植樹や「富士山こどもの国」ではグループの仲間と計画した自然体験を楽しんだ。被災していない地域の子どもたちにとって仲間の頑張っている姿をみて、自分も頑張るという気持ちを持つための機会とした。

### 5 成果と課題

- ・個人、グループに目標の設定をさせ、その目標を意識し共有する指導の方法をとることで仲間との絆を強く深めることができた。
- ・地元企業をはじめ様々な団体の支援を得ながら実施した本事業は、参加した子どもたちに生涯にわたる友情と今後に向けての元気を送ることができた。
- ・企画の段階から協力していただく教育委員会、交流の家担当者間で十分な意思疎通が必要である。
- ・参加者への追跡調査ができればさらによかった。

協議内容

発表者への質疑の中で今回の事業に当たっての運営のポイントについてあらためて協議された。運営のポイントについては(1)協力を得られる教育委員会を探すこと。その内容については現地での参加者の募集や取りまとめ、事前連絡及び実際の事業時における引率・指導であること。(2)寄付金等の支援をいただくこと。内容は被災した地域の子どもたちのための必要運営費及び運営の支援を市民からの支援金や企業等の関係機関へ依頼し、支援をいただいたこと。事業を実施するに当たって、多くの人と人のつながりからご協力をいただけたことが重要なポイントであったことを確認した。



### 事例3 「タイニーキャンプ（小学校低学年対象事業）の普及」

発表者：国立信州高遠青少年自然の家 企画指導専門職 酒井 憲一 氏

参加者数：15名

#### 事業について

##### 1 事業のねらい

自主性・協調性・基本的生活習慣の確立のきっかけづくりを目指す「タイニーキャンプ」を先導的なモデル事業として位置づけ、近隣の公立施設にタイニーキャンプを普及し、一人でも多くの小学校低学年児童に自然体験活動の機会を与える。

##### 2 実施期日

平成22年3月	事業普及委員会への参加協力依頼
平成22年6月	当所のタイニーキャンプ視察
平成22年7月	平成22年度第1回事業普及委員会
平成22年10月	公立1施設タイニーキャンプ実施(当所職員による直接指導)
平成23年2月	平成22年度第2回事業普及委員会
平成23年3月	公立1施設タイニーキャンプ実施(震災のため中止)
平成23年6月	平成23年度第1回事業普及委員会
平成23年10月	公立3施設タイニーキャンプ実施(当所職員による直接指導)
平成24年1月	平成23年度第2回事業普及委員会

##### 3 対象

タイニーキャンプ参加者：小学校1, 2年生

事業普及委員会

- ・長野県(阿南少年自然の家, 松川青年の家, 望月少年自然の家)
- ・山梨県(八ヶ岳少年自然の家)

##### 4 事業内容

タイニーキャンプは、動物になって遊ぶ運動プログラム、ボランティアによる絵本の読み聞かせ、粘土遊び感覚で作るすいとん料理の3つが主な活動プログラムである。各公立施設が自施設のフィールドや郷土の特色を生かしながら、タイニーキャンプを実施した。自施設のフィールドアスレチックで運動プログラムを実施したり、郷土料理を参考にすいとんを作ったりして、各公立施設で工夫が見られた。

また実施にあたっては、当所のデータ資料を提供したり、当所職員が実施当日に直接指導にあたりたりして、今後も自施設のみで運営できるように協力した。

##### 5 成果と課題

広く公立施設に普及することで、2年前より2倍以上の児童が参加できた。

各公立施設が自施設のフィールドや郷土のよさを見直すきっかけになった。

安全性確保のために、多くのボランティアを確保する体制作りが必要である。

#### 協議内容

- ・夜尿やホームシックなど、低学年独自の問題への対応について、ボランティアのかわり方や班編製の工夫、安全体制が重要であることが確認された。
- ・参加した子どもたちの次への成長過程について、さらに検討する必要がある。

#### 事例4 「東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）への対応として，那須甲子青少年自然の家が避難者のために何ができたのか」

発表者：国立那須甲子青少年自然の家企画指導専門職 鈴木 昭博 氏  
参加者数：23名

##### 事例について

##### 1 事例の概要

3月11日に起きた東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）。誰もが予想だにできなかった災害に，那須甲子青少年自然の家として避難者のために何ができたのだろうか。避難所として運営していくために，試行錯誤を繰り返しながら，避難者対応のプログラムを年齢や状況に応じて企画したり，避難者の自治組織を立ち上げるための支援をしたりと，那須甲子青少年自然の家としてのソフト面，ハード面を活かしながら取り組んできた。その取り組みの中で学んだことや今後の施設としての課題などの記録事例である。

##### 2 実施期日

平成23年3月11日（金）～平成23年8月30日（火）  
平成23年3月11日（金）：東北地方太平洋沖地震発生  
平成23年3月13日（日）～平成23年8月26日（金）：避難所運営  
平成23年7月21日（木）～平成23年8月30日（火）：リフレッシュキャンプ

##### 3 対象

避難者，リフレッシュキャンプ：福島県内小学校1年生～中学校3年生

##### 4 事例内容

避難所運営を通して：未曾有の大震災後，青少年教育施設としての役割から，突然に避難所として役割が変わり，その中で避難者のために職員，様々なボランティア，行政機関との連携をし，試行錯誤を繰り返しながら避難所運営を行ってきた。時間が経つにつれて，避難者対応の内容も変化していった。子どもたちを対象にした「なすかしクラブ」を立ち上げ，集団遊びなどのプログラム支援を行うと同時に，ハイキングなどの大人向けのプログラム支援にも発展していった。

避難者の自治組織立ち上げでは，話し合いを繰り返しながら組織作りを行った。リフレッシュキャンプを通して：文部科学省，機構本部主催のこの事業は，福島県の小中学生を対象に3泊4日のキャンプを11クール行った。2,692名の参加者があり，子どもたちは，ハイキングや屋内プールなどでリフレッシュしていた。たくさんのボランティア，他施設の職員等の協力により無事に運営することができた。

##### 5 まとめ

ホスピタリティ（おもてなし）発揮の場であった。

施設としての支援のあり方を学べた。

被災者の自立支援のための手伝いができた。（自治組織）

宮城（亘理町），いわきに職員を派遣しボランティア活動を行った。

ネットワークが広がった。各支援団体，文科省，本部，ボラなど。

自分たちが何ができたのではなく，避難者やたくさんのボランティアから学ぶことが多くあった。

##### 協議内容

主に，避難所としての運営面についての質疑が多かった。避難者に対してどのように支援をしていくのか，避難者の自治組織立ち上げについては，どのような流れで進めていったかなどである。避難所としては，すべてが初めてのことであり，その場その場で現状を把握し，役割分担を明確にし，朝夕の職員打ち合わせで情報の共通理解を図ったことが良かったなどが成果として報告された。

### 3 ワークショップの概要

#### ワークショップA「自然観察におけるファシリテーションの手法」

講師：福島県自然保護協会事務局長 横田 清美 氏

参加者数：17名

#### 1 趣 旨

自然観察は、自然保護教育の一環として行うものであり、五感を使って自然を体験させ、人と自然とのかかわりや自然のしくみに気づかせ、自然を大切に思う気持ちを育む活動である。自然観察の参加者の能力、やる気、主体性を引き出す指導方法や実際に行う際の留意点などを学んでいく。

#### 2 内 容

##### (1) 自然観察の概要説明

・五感を生かして・名前にこだわらない(勉強会ではない)・採取しないで観る

##### (2) 指導方法の説明

Teach-Learn(知識を教え込み、それを記憶する)ではなく、Educate-Study(能力を引き出し、考究する)で指導する。人から答えや知識を教えてもらうよりも、自ら疑問を持ち、自ら考え、自力で気づきや発見をした方がはるかに感動は大きい。

##### (3) 指導者の役割についての説明

人と自然との仲立ち、参加者同士の仲立ちをして、参加者が自然から様々なことを学び取り、感じたことを参加者同士で伝え合うことの手助け(ファシリテーション)をする。

参加者を楽しませる。

自然を傷つけない方法で自然を観察し、学び、自然を慈しむ心を養うよう指導する。

##### (4) 指導者の心構えを説明

主役は参加者、先生は自然、指導者は手助けである。

##### (5) 自然観察会の体験

歩きながら気になるものを見つけたら指導者に伝える。全員で見る価値があるものがあればみんなで共有した。

歩くことが目的ではない。ときどき立ち止まる。参加者が見つけやすいようにする。

ほめ方に強弱をつける。

知識を教えるわけではない。観察の方法を教える。

##### (6) 生き物についての「体験談」を話させる。

カードをテーブルの上に並べて一つ選び、1分程度の体験談を話した。

人前で何か話すときには、体験してことを話すと説得力がでる。

##### (7) スライドを見ながらの復習

「生き物をつかまえる」感動 その環境をこわしてほしくないという思いが生まれる自然観察 自然保護につながってくる。

自然観察指導・・・自然の知識がなくても技術があればできる。

知識があっても話を集中して聞かせることができなければならない。

参加者を楽しませる。参加者に関係がある話題・意外性・ユーモア

参加者に探させる 上手にほめる 参加者がより意欲的になる 全員に話すべきことがあれば集めて話す。

参加者の表情をよく見て、興味をもっているかを確認しながら進める。

触らせてみる。音を聞かしてみる。味わってみる。

気配りが大切である。全員にどう平等に見せるか。体調管理(トイレ)に努める。

熱意が必要である。

自分自身も楽しむ。

危険な生物についての知識をもつ。

「アメ」(参加者を楽しませつつ)と「ムチ」(自分の伝えたいことを入れる)を使い分ける。

より自然が大好きになる子を育てていく。

## ワークショップB「森のようちえんが育む子どもの生きる力」

講師：NPO法人こどもの森ネットワーク理事長 橋口 直幸 氏

参加者数：16名

### 1 趣 旨

ドイツで視察してきた「森のようちえん」の福島での実践例を中心に、指導法や子どもの変化について学んでいく。後半では、幼児といっしょに森に出かけ、子どもを自由に安全に遊ばせながら、幼児向けの森遊びでのアクティビティについても学びを深める。

### 2 内 容

#### (1)「もりの幼稚園」の目的の説明

自然の中でのびのびと遊ばせる。

幼児教育の代替案を提供する。

#### (2)「もりの幼稚園」における子供に対する大人の接し方の説明

必要以上に干渉せず、自由にのびのび遊ばせる。

いつでも、子供とアイコンタクトがとれる。

「自分の信頼している人にいつも見守られている。」

安心感

その安心感が、子供が森でのびのび遊ぶ雰囲気をつくっている。

#### (3)「もりの幼稚園」に通った子供はどのような教育効果があるか説明

集中力が高まる。

元気でたくましくなる。

創造力が豊かになる。

精神的に強く、安定する。

成績も良い。

#### (4)「感性の土壌を育む」ことについて説明

なぜ幼児に自然体験が必要か。

現代の子どもは体験不足

自然体験活動の教育的効果

森遊びの教育的効果

幼児の自然体験における大人の関わり方

幼稚園でできる身近な自然体験

#### (5)子供の活動の観察

木登り

どんぐり拾い どんぐりを使っての工作・立体お絵かき

ふりかえり

木登り・チームワーク・見守り・協調性・子供自ら・距離感・声を出したくなる。

## ワークショップC「読書活動と体験活動を関連させた指導法」

国立磐梯青少年交流の家企画指導専門職 遠山 直樹 氏

参加者数：10名

### 1 趣 旨

近年、青少年の読解力や思考力の低下が問題視されている。地域の民話を聞き、その舞台を訪ね、さらにその体験活動をもとにした絵本作りの実践の紹介と実際に絵本作りを体験することで、読書活動と体験活動を関連させた活動についての理解を深めていく。

### 2 内 容

#### (1) 事業概要紹介

平成22年度に子どもゆめ基金オープンドリーム事業として読書活動と体験活動を関連させた事業「きいて・よんで・つくって・いって」を計画し実施した。親子での参加事業とし、民話「あしなが・てなが」を取り上げて読み聞かせ・絵本作り・木工クラフト・ウォークラリーなどの読書活動と自然体験活動を関わらせて事業を展開していった。民話の舞台として磐梯山が関係していることで参加者も磐梯青少年交流の家を訪れて、活動を通して民話「あしなが・てなが」をより身近に感じられたようであった。

#### (2) 事業での各活動プログラムについての紹介

語り部による民話

講師：いなわしろ民話の会

会場...多目的室（じゅうたん敷きの部屋，小さい子もくつろいで民話を聞ける）

時間...70分（多くの会津の民話を紹介いただいた。一方で小さい子が集中しきれなくなる中心となる「あしなが・てなが」の話の印象が薄まってしまう）

民話のオリジナル絵本作り

講師：漫画家「元フジオ・プロダクション：河口仁先生・てらしまけいじ先生」

会場...多目的室（じゅうたん敷きの部屋，座卓での絵本作り活動）

時間...120分（A4サイズ・4枚とB4サイズ・1枚に絵を描く：1冊分，対象の子どもにとって活動量が多くないか心配したがほぼ全員が描き終えた）

食べ物と栄養のお話

講師：交流の家食堂栄養士

会場...第6研修室（演台を中心にいすに座って話を聞く）

時間...30分（子どもが興味を持てるように提示資料を用意し，質問などもして進めた）

ふれあいタイム【森の贈り物・木工クラフト】

会場...第6研修室（活動内容のアナウンスをしてから制作にとりかかる）

時間...120分（親子それぞれが思い思い手にとった材料で作品にしていた，講師の河口仁先生・てらしまけいじ先生にも参加いただき子どもたちと交流されていた。）

「民話の舞台」天鏡台ウォークラリー

コース...交流の家玄関前 昭和の森・天鏡台 交流の家玄関前

時間...180分（子どもの年齢順で親子ごとに出発，予定時間で全家族が目的地に到着，自由時間には子どもたちが遊びで交流した。）

閉講式

会場...多目的室（製本されたそれぞれの絵本を手渡して解散）

時間...15分

#### (3) 絵本作り体験

事業と同じ流れで各自絵本作りを体験した。

## ワークショップD「火山のジオパークを100倍楽しむ方法-磐梯山を例に-」

磐梯山噴火記念館副館長 佐藤 公 氏

参加者数：12名

### 1 趣 旨

子どもたちが学校で学ぶ火山は、知識の習得に追われ、そのダイナミズムを感じとることは難しいと思われる。そこで、楽しい実験と映像と実物を使い、火山が大好きな子どもに変身させる方法を学んでいく。

### 2 内 容

#### (1)「ジオパークとは何か」についての講義

歴史の浅いジオパークと世界遺産との相違

日本のジオパークの紹介

ジオパークの有効性

#### (2)「磐梯山地震火山こどもサマースクール」についての講義

1995年の阪神大震災がきっかけ

過去11回の開催

磐梯山地震火山こどもサマースクール

こどもサマースクールの有効性

#### (3) 磐梯火山講座(中学1年生向け)の実験体験

成層火山を作る実験

「泥流はどこへ」実験

「岩なだれ」実験

「マグマのねばりけの違い」実験

#### (4)「地学教育の重要性」についての講義

中学1年生で終了する地学教育

2011年3月11日

津波防災教育

地学教育の重要性

#### (5) 質疑・応答

東日本大震災によって危険が高まった火山はあるか。

観測体制、最近の事例によって答える。

ワークショップD「コミュニケーション作りのための体験活動」

日本体験学習研究所研究員 岡田 衣津子 氏

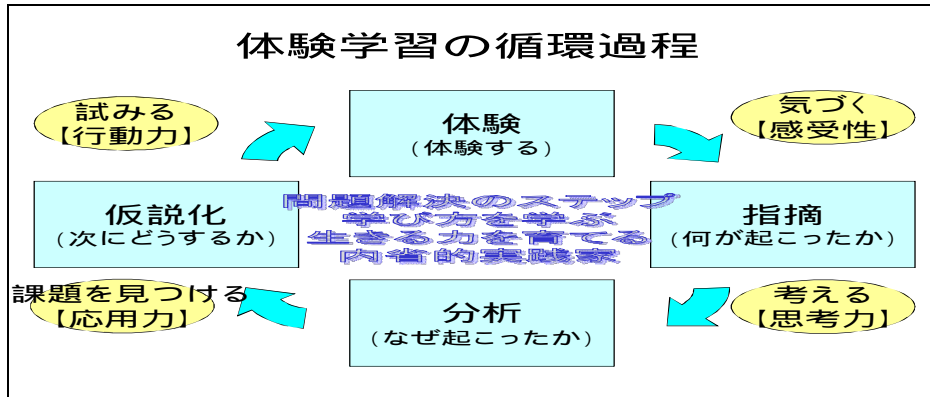
参加者数：12名

1 趣 旨

青少年の抱える課題として、コミュニケーション能力や社会規範意識などの低下が挙げられる。そこで、コミュニケーション能力の育成を目指した「体験学習の手法」を研修し、よりよい人間関係を構築するためのファシリテーターとしてのスキルの向上を図る。

2 内 容

(1) 小講義『体験から学ぶということ』



(2) 実習 『フォースド・チョイス』

実習についての説明～お互いを知り合うために行う。講師が提示した言葉から選択し、どうしてそれを選んだのか理由をそれぞれ説明する。

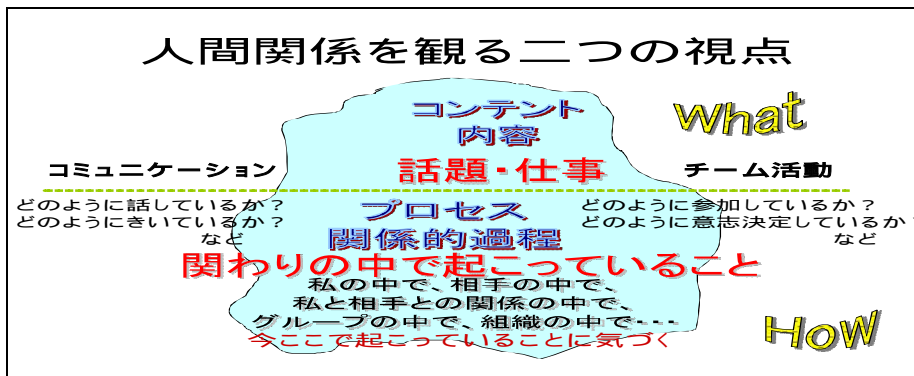
実施

ア 「冬山」「田舎の秋」「夏の海岸」から選択し、それぞれ理由を話す。

イ 「時が止められる時計」「自分の心が見える鏡」「好きな人にいつでも会えるドア」から選択し、それぞれ理由を話す。

ウ 「みる」「きく」「はなす」から選択し、それぞれの理由を話す。

(3) 小講義『人間関係をみる二つの視点』



(4) 実習 『おもしろ村』

導入・グループづくり

実施～チームとして、ある課題を解決する実習。そのために必要な情報は、すべて情報紙というカードの中に書かれている。各情報紙には、部分的な情報しか書かれていないため、全員の情報を集め課題を解決する実習である。(情報は口頭のみで伝える。他の人に見せることはできない。)

ふりかえり～ふりかえりシートをもとに実習を各自ふりかえる。

わかちあい～それぞれのふりかえりを伝え合う。

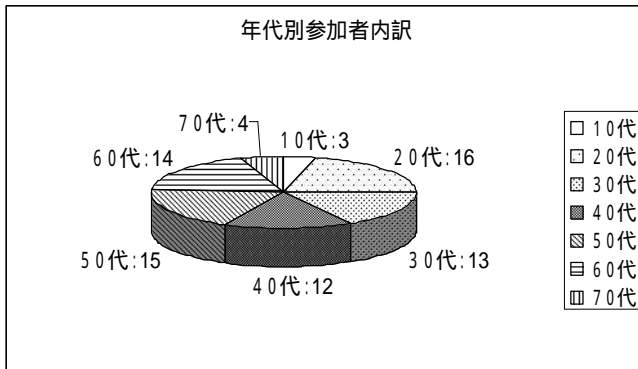
全体のわかちあい

(5) 全体ふりかえり

## 事業評価

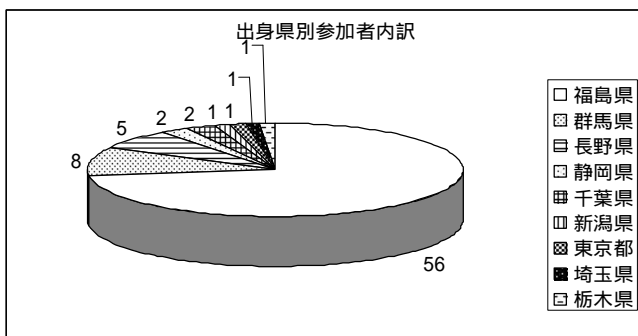
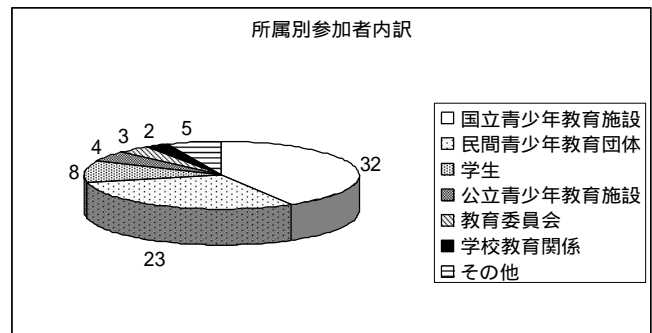
### 1 参加者分析

募集定員100名のところ，77名の参加があった。（男性59名，女性18名）



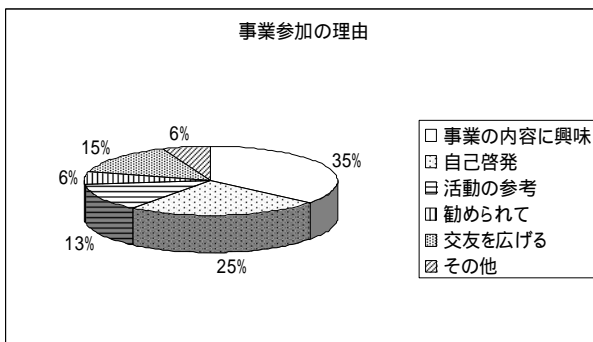
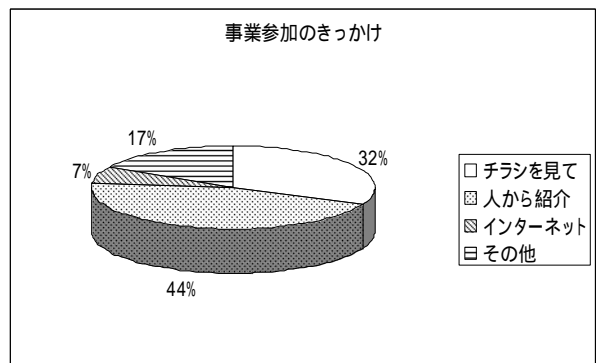
参加者の年代は，10代から70代まで幅広い世代からの参加があった。参加世代の割合もあまり偏りがなく，異世代の交流も見る事ができた。

所属別参加者内訳を見ると，残念ながら学校教育関係者の参加が少なかった。昨年も同じような傾向にあったが，学校教育関係者がより興味を引くような内容・広報の工夫が必要であった。



出身県別参加者内訳は，開催施設に偏りが見られた。事業の趣旨（全国へ発信）を考えると，広範囲からの参加者を確保する必要がある。交通費などを考慮した開催の在り方を見直す必要があると思われる。

事業参加のきっかけは，半数近くが「人から紹介されて」という回答であった。より多くの参加者を集めるための広報の仕方について新たな手だてを考える必要があると思われる。



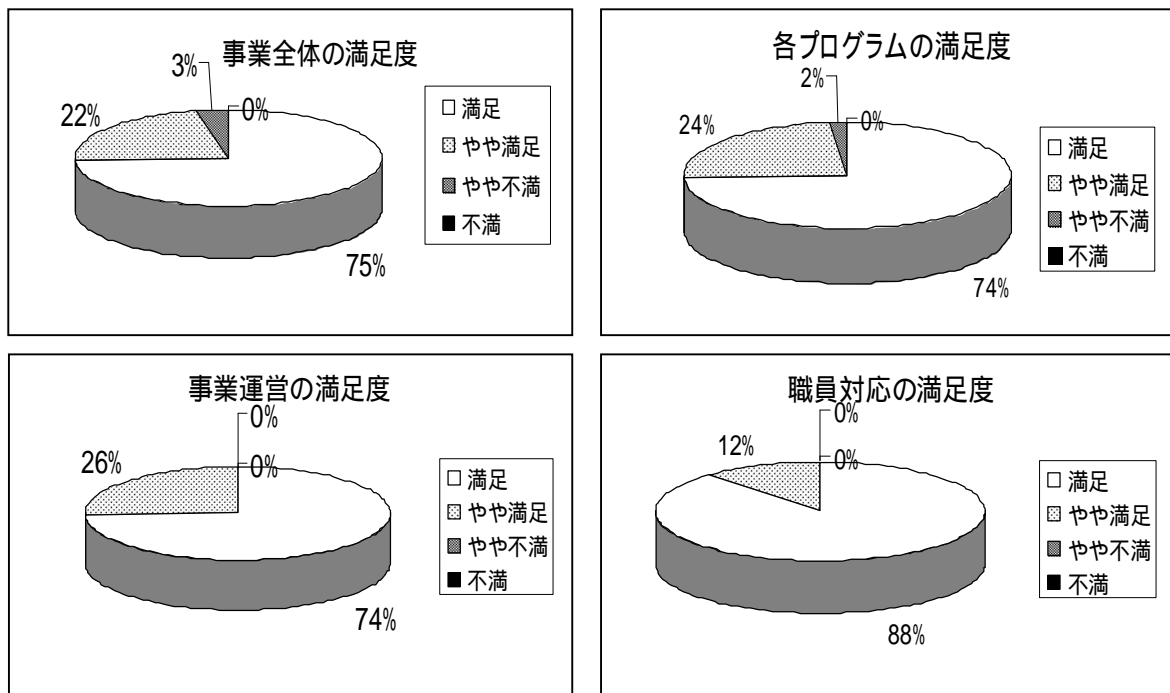
事業への参加理由は，「事業の内容」や「自己啓発」で半数以上を占めている。今後も参加者がより興味をもつような内容やスキルアップができるようなプログラムにしていくことが大切であるとする。



## 2 アンケート調査

参加者に対して、事業後のアンケート調査を実施し、本事業の成果と課題を考察する上での資料とした。

### (1) 事業全体に関するアンケート調査結果

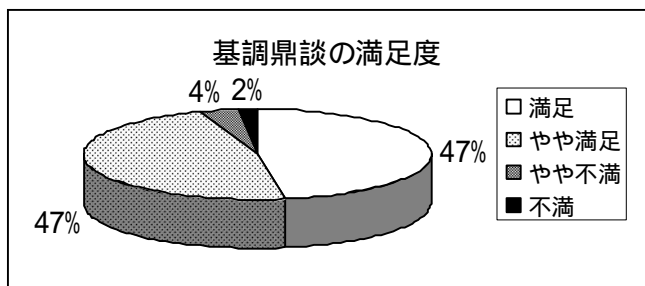


事業全体の満足度を問うアンケート調査では、「満足」「やや満足」を合わせるとどの項目も97%以上と高い評価を得ることができた。事業全体と問う項目で2名が「やや不満」と回答した。座学の時間が多かったことや事例発表の内容に関わることが要因であった。また、各プログラムについても同じ方が1名「やや不満」と回答した。1名の意見ではあるが講演・事例発表という受け身の研修ではなく、参加者がさらに積極的に参加できる事業の在り方も検討していく必要があると思われる。

#### 【自由記述】

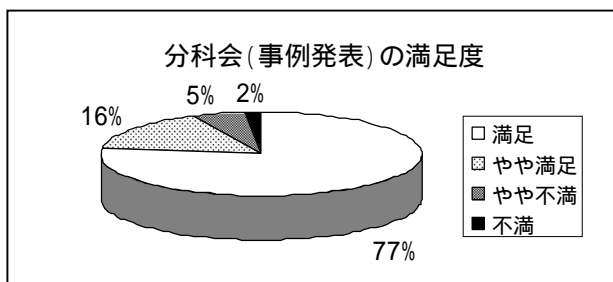
もっと長くいたいと思うくらい有意義な時間を過ごせた。  
 貴重な体験ができ満足できた。  
 それぞれの施設の話が聞けた。  
 プログラム間の余裕もありよかった。  
 どのプログラムも初めて知ったことがあって楽しかった。  
 新しい学びがたくさんあった。  
 時間がおしてしまったところもあるがとてもスムーズだった。  
 ほぼ時間通り進み円滑であった。  
 細かいところまで気配りされていた。  
 職員全員で対応している様子が伝わってきた。  
 職員の方に常に丁寧な受け答えをしていただいた。  
 職員の対応が素晴らしかった。  
 職員の皆様の心配りが行き届いていて感動した。  
 職員の皆様が明るく元気で好印象であった。  
 駐車場の案内に感謝する。  
 もっと体験したい。椅子に座って話を聞いている時間が長かった。(やや不満)  
 参加者同士の発言の場があればよかった。(やや不満)  
 プログラムはよいものもあり、もう一つのものもあった。(やや不満)  
 全部の事例発表が聞きたかった。(やや満足)  
 施設の配置がよく分からなかった。(やや満足)  
 2事例くらい聞きたかった。(満足)  
 少し運営サイドと参加者の間に距離があったように思う。(やや満足)

(2) プログラムの内容についてのアンケート調査結果

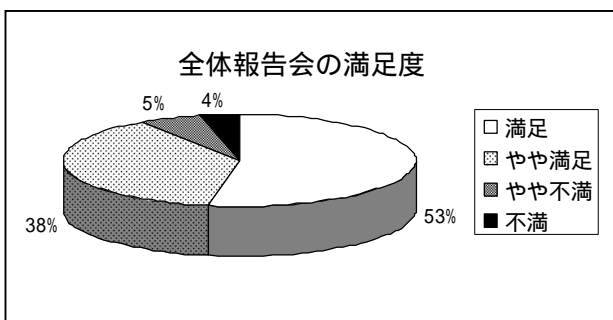


【自由記述】

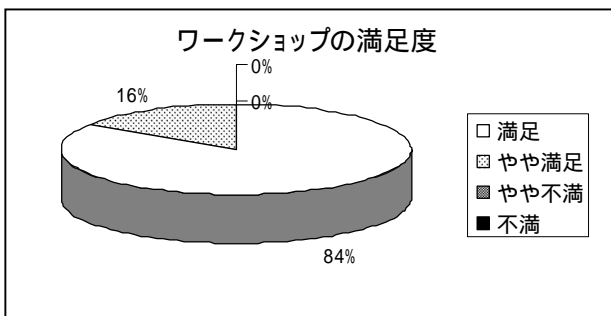
3名の先生方の掛け合いがおもしろく、また、青少年期の体験はいろいろなところに現れていると感じた。  
 自分を重ねられた。  
 3名の方の性格を熟知しての進行、落ち着いた雰囲気の中で学ばせていただいた。  
 自分の少年期の体験を思い出した。  
 個性が出てよかった。  
 柔らかい雰囲気の中でとても面白い話が聞けてよかった。  
 普段体験できない貴重な時間を過ごせ、自分を見直すことができた。  
 現代の子どもたちと違った経験をする事ができた。  
 もう少しテーマへの掘り下げがあってもよかった。(やや満足)  
 もう少し3名の方の体験を引き出せるとありがたかった。(満足)  
 もう少し時間があればよかった。(やや満足)  
 話の内容は面白かったが体験活動と関わりが不明瞭であった。(やや満足)  
 話が一定で少し時間が長かったように思う。(やや不満)



どの分科会も高い評価であったが、2名から「やや不満」、1名から「不満」の回答であった。発表を聞くだけで、協議の時間があまりなかったことが理由であった。



全体報告会は、他のプログラムと比べると「満足」の割合が低かった。「他の分科会の様子が分かった。」「全体を把握できた。」という意見の反面、短い時間での発表のために内容が十分に把握できなかったことが低い満足度になった理由であった。



どのワークショップも高い評価であった。自己啓発を目的に参加した参加者のニーズと一致したことも一要因だと思われる。しかし、募集要項の内容と実際の内容に違いを感じることにより満足度が低くなった参加者も見られた。

### 3 成果として

- (1) 事業全体に関するアンケート調査結果から考察すると、参加者にとって満足度の高い事業を展開することができた。
- (2) 基調鼎談や4つの国立青少年教育施設の事例発表を通して、青少年の体験活動の必要性・重要性や先進的事例を発信することができた。
- (3) ワークショップの時間を十分に確保したために、内容も充実したものとなり、参加者のスキル向上や満足度につながった。
- (4) 情報交換会やPRシートにより、参加者同士のネットワークづくりや情報交換を進めることができた。

### 4 課題として

- (1) 5つの国立青少年教育施設から広範囲に渡って広報を進めたが、交通費など他県からの参加は経済面での負担が大きかった。今後、交通手段等を考慮した参加者募集の方法を考えていく必要がある。
- (2) 昨年の課題を受け、「分科会」の時間を長く設定し充実させたことは参加者に高い評価を受けたが、各分科会の報告を行った「全体報告会」の満足度が他のプログラムと比較すると低かった。参加者からは、積極的に参加できるようなプログラムが望まれている。講演・全体会・分科会・ワークショップというこれまでのプログラムを再検討することも必要である。
- (3) 事業後のアンケート調査の形式については、事業評価の資料となることを十分に考慮したものにすべきであった。各分科会やワークショップの満足度に対する理由を書くスペースが少なく、ほとんどの回答に記入がなく、考察が十分にできなかった。
- (4) ワークショップの講師については、福島県内で活躍している方が多かった。福島県内からの参加者からは、普段話を聴くことができないような方だとさらによかったという意見が出された。
- (5) 事例発表・分科会において、指導助言の場を設定することも今後検討する必要がある。